

【生活科】教科提案

「自立をめざして」

～自己の思い・願いがいきる協同的な学びを進める～

1, 研究テーマ設定の理由

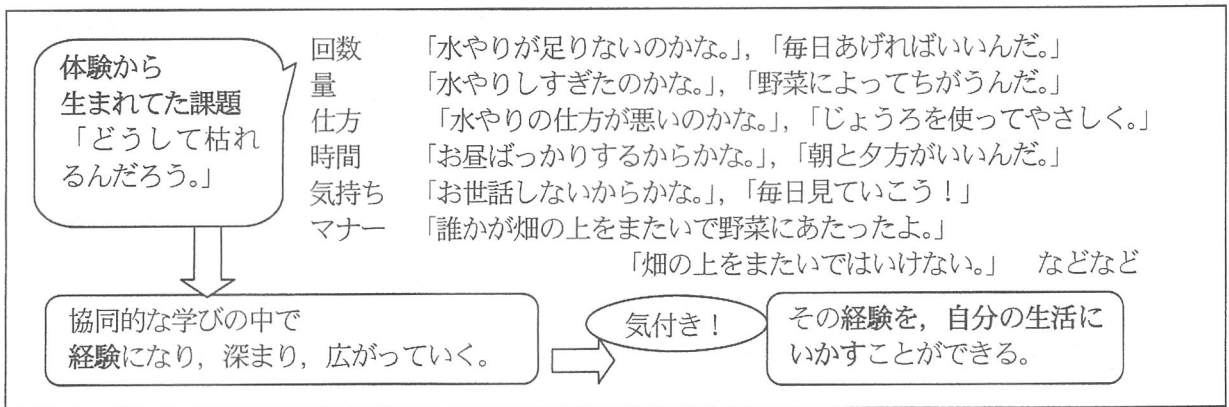
(1) 学校提案とかがわって

新学習指導要領の生活科目標は「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然のかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」とある。

生活科学研究部では「自立への基礎」を「生活上必要な経験を得ること」と定義した。

「生活上必要な経験」とは「もの・こと・ひと」と自分自身が気持ちよく過ごしていくためには「こんなふうになればいい。」という生きていく手立てである。例えば、子どもたちが“野菜を育てよう”の活動をする。活動の中で「お水あげなかったから枯れちゃった。残念だな。」「お世話をしたら野菜が育って見事野菜を収穫してうれしい。やったー。」など、たくさんの体験をする。「でもどうして、枯れちゃうんだろう?」「どうしてお世話するといいいんだろう?」とたくさんの「なぜ?」が生まれる。そして「なるほど! こういうことか!」と気づけたときに体験が経験に変わると考えている。

これらの体験が繰り返され、「なぜ?」の理由を探究したり、気づいたりすることで経験となっていく。「経験」の質は子どもたち一人ひとり異なる。それは同じ活動をしていても、同じ体験をするとは限らないし、子どもたち一人ひとりの興味・関心は違うからである。



また体験にとどまり、経験にまで至らない子どもたちもいるだろう。そこで協同的な学びをいかし、進めていきたいと考える。子どもたちが体験、経験を共有することで、今までより質の高い経験を得ることができる。小グループでとどまらず、全体のものになることもあれば、子どもたち一人ひとりにかえることもある。どの学習形態でも課題に向かう対話を意識し、進めていきたい。

加えて体験を経験に変えるには、自ら「もの・こと・ひと」にかかわりを求めなければならない。

(2) 生活科でめざす子ども像

「体験を経験に変え、生活にいかすことができる」が生活科でめざす子ども像である。

“野菜作り”で経験したことを、“野菜作り”にだけいかすのではなく、自分の生活の様々なところにつなげられることこそ子どもたちが「自立への基礎」を養っていると考えられる。

これからも、この経験をいかして、心地よい生活を送れるようにしてほしいと願う。

2, 生活科学習における「学びの質の高まり」

「対話の中から、体験が経験に変容していく過程また経験が深まり・広がったとき」子どもたちに「学びの質の高まり」が見られると考えた。子どもたち一人ひとりがたくさん「もの・こと・ひと」にかかわって活動をしていく。その中で体験したことを自分で深め、経験としていく。自己の体験や経験が対話を通して、「ぼくの体験・経験したこと、〇〇ちゃんの体験・経験したことってつながっているね。」と認識できたときが「学びの質の高まり」といえると考えられる。

3, 研究の成果と課題

研究は主に3つの方法進めていった成果と課題である。

一つ目は、「課題は子どもたちから生まれたものであること」とした。このことで子どもたちは積極的に課題に向かうことができた。また、課題の明確さが対話の深まりの手立てとなった。

生活科は子どもたちの体験や思い・願いから進めていく教科である。これからも教師は子どもたちの思い・願いをみとり、子どもたちの思い・願いを含み、合わせて、教師がねらう「自立への基礎」のための「習慣や技能」を取り入れた課題設定をしていくことが必要である。

二つ目は、生活科を中心とした各教科の単元構成であった。

子どもたちの表現方法や活動内容を広げるために、国語や図工、算数、様々な教科を生活科と関連付けて進めていくことができた。各教科を通して、子どもたちが様々な見方・考え方をもち、生活科で学習することを活かすことができていた。

国語・・・俳句づくり、作文、観察名人になろう、手紙をかこうなど

算数・・・野菜の長さ調べ、かけ算(和菓子の数はいくつ)、大きな数(紅葉で数調べなど)

図工・・・花器づくり、自然のものをつかって巨大ないけ花作り、陶芸、染物など

食育教育…和食のマナー、和菓子作りなど

これからも、生活科を中心とした各教科とのかかわりが大切であると考え。

三つ目は、『附属っ子コミュニケーション“和み”大作戦』を継続して行っていくことであった。

『附属っ子コミュニケーション“和み”大作戦』を柱としたカリキュラムを作成し進めていった。

本校は学校区が広く、子どもたち全員が同じ生活経験や地域性を持っていない。そのため、子どもたちが共有できるものとして考えた。共有できる“和み”と子どもたち一人ひとりが持っている生活経験から協同的な学びを広げ、深めていけたと考える。

『附属っ子コミュニケーション“和み”大作戦』

「和」の生活様式に根ざした学習活動である。

昨年度から1・2年生が生活科年間17時間を用いて行ってきた。今年度は2年目となった。

内容は昨年度と大きく変わっていないが、子どもたちの実態や思い・願いで多少変化させた。

- (1)「日本の季節感」を感じる…お花飾り、学校たんけん、和歌山城内たんけん
野菜作り、季節の行事、俳句作りなど
- (2)「日本の生活習慣」を身につける…茶道やしげ花体験を通して、心地よい雰囲気を感じるために礼儀、所作を身につけることができた。
- (3)「日本の伝統文化」に触れる…本物の“和”の雰囲気に触れるためゲストティーチャーなどを招いたり、見学に行ったりした。
茶道・畳作り・和菓子作り・など。
- (4)他教科・領域との関連…(1)～(3)を柱とし、国語や算数、図工・食育教育などで生活科に関連させての単元構成し、進めていった。
- (5)保護者の方とのふれあい…“和みたい”を組織し、子どもたちのより充実した体験・活動を支援していただいた。

4, 研究の評価

子どもたちが自己の課題に向かっている時、小グループで課題に向かう時など様々な場面で子どもたちにノート、作文、作品などの表現活動を行わせた。教師は、表現したものを、比較し、どのような変容をしているかを探っていった。

しかし、グループで話し合い活動を進めている子どもたちの内容をすべてみとめることは困難であった。また、子どもたち自身も自分たちの話し合いを“可視化”できず、対話をより深めることができなかった。

研究の評価方法として、子どもたちの対話の手立てとして、グループでの話し合い活動での内容の“可視化”が今後の課題の一つの考える。

- 参考文献 ○新小学校学習指導要領解説 生活編 文部科学省
○2008 教科・領域提案 和歌山大学教育学部附属小学校 生活科
○学校の挑戦～学びの共同体を創る～ 佐藤 学 小学館